三浦ひろき2019年活動報告

02
SECOND ISSUE

関わることを、おもしろく。

01. ACTION　6つのアイデアに対して取り組んだこと
02. INTERVIEW　矢田 明子 × 三浦ひろき 特別対談
03. COLUMN　コラム「一年を振り返って」
04. PROFILE　プロフィール

浜田をよくするための6つのアイデア

6つのアイデアに対して取り組んだこと

01 学校と地域社会との距離を縮める環境を整えます。

浜田市でもようやく県立高校の魅力化事業へ着手。生徒獲得の学校間競争が強まる中、それぞれの学校ではどんな経験ができて、どんな将来につながるのかを明確にすることが求められています。市内３校と今後の取り組みを一緒に考えられるよう、関係性を深めるべきと考えています。地域との距離を縮めることで、子どもが憧れる「意志ある大人」を育て、その人たちが還流する環境をつくることが、将来の浜田への最も重要な投資事業ではないでしょうか。現在配置されたサポート人員は一人。各校に一人ずつが適切と考えます。一般質問において、本事業に対する市の支援拡充を求めました。あわせて、0歳からの教育制度の設計、家庭教育への支援など、教育予算全体の拡充を求めています。11月より、総務文教委員会へ所属することになりました。一層、浜田市の教育行政に関わっていきます。

02 市民一人ひとりの力をまちの力に変換する仕組みをつくります。

最近よく耳にする「SDGs」。「地球上の誰一人として取り残さないこと」を誓った国際社会共通の目標で、17のゴールが示されています。どれか一つではなく、すべてを総合的に取り組むことが大切という考え方です。浜田が抱える課題も、世界が抱える課題と根本原因や構造が似ています。SDGsの考え方を地方創生にも役立てようと、勉強会を主催しました。議員、行政職員、地域の方々に加えて、高校生も参加してくれました。様々な分野・世代の人たちが一緒に考える場がもっと必要ではないでしょうか。ものごとがうまく進まない原因の一つは、様々な「分断」と言われます。溝を埋める意識で、こうした機会をこれからもつくっていきます。

＊SDGs:「Sustainable Development Goals（持続可能な開発目標）」の略称。
2016年に国連で採択された2030年までの目標。

03 「浜田にいても最先端」をキーワードに、公共施設を経営します。

安定した経営には、収入を増やす、支出を減らす、この二つがポイントです。地球温暖化対策として推進される「省エネ」や「再エネ」は、温室効果ガス削減に加えて、「節約」につながります。
浜田市で言えば、歳出軽減です。2019年3月に、浜田市地球温暖化対策実行計画（事務事業編）が策定されました。この計画の成果を出すために、「節約」の観点を強調し、削減目標を金額に置き換えて推進することを提案したところ、今後は施設ごとの燃料使用量を把握し、それをもとに目標を設定することになりました。成果を期待したいと思います。リースによるLED一括導入、初期投資のかからない太陽光パネルのリースといった具体策の提案やエネルギーの地産地消推進も引き続き提案し、コスト意識の醸成をはかっていきます。

6 IDEAS + ACTION

04. PROFILE プロフィール

三浦 大紀（みうら ひろき）

1980.1.29 浜田市生まれ 40歳

国府保育園→松原小学校→浜田第一中学校→浜田高校→早稲田大学政治経済学部
衆議院議員橋本龍太郎・橋本岳秘書、NPO法人日本リザルツ事務局次長を経て、浜田市へUターン。NPO法人てごねっと石見のスタッフとして、商店街活性化事業や創業支援事業などに携わる。2014年に株式会社シマネプロモーションを設立し、県内企業や自治体の事業開発支援を行う。
2018年10月浜田市議会議員初当選。現在、議会広報広聴委員長、総務文教委員、議員運営委員、自治区制度等行財政改革推進特別委員。

NPO法人てごねっと石見 / 理事、しまコトアカデミー / メンター
オールしまねCOC＋事業（島大・県大・松江高専）/ キャリアプランナー
しまね産業振興財団よろず支援拠点事業 / サブコーディネーター

●趣味：山登り、DJ　●尊敬する人物：橋本龍太郎
●好きな言葉：幸せ　おいしい　美しい　健康　最高　遊ぶ　無自性
●長所：思い立ったらすぐ行動する　●短所：忘れっぽい

＼活動報告やってます／

議員活動が始まってから、概ね週に一度の活動報告を記録しています。
バックナンバーもありますので、ぜひご覧ください。

三浦ひろき事務所
697-0033 島根県浜田市牛市町75
TEL：050.5216.0261
問い合わせ：info@miurahiroki.net
ウェブサイト： miurahiroki.net

04 社会の変化に対応した企業・産業の成長機会をつくります。

中小企業や小規模事業者に悩みはつきもの。僕も小さな会社を立ち上げ、その当事者の一人でもあります。（公財）しまね産業振興財団が行う、「よろず支援拠点」事業において、お悩み相談を受けていますが、売上げを伸ばしたい、新商品を開発したい、商品の良さがうまく伝わらないなど悩みは様々。お話を伺いながら感じる事業者の方々が望む支援と行政施策のミスマッチ解消について、担当課との改善案協議につなげています。また、産業建設委員会（当時）の旧お魚センター活用に関する意見のとりまとめにおいては、ファシリテーターを担いました。まとめた意見書は、指定管理事業者募集要項に反映されています。他地域の事例紹介や意見書・企画書の作成など、自身の得意分野を積極的に生かしていきたいと思います。

05 市内外の人が交流しやすい環境と機会をつくります。

公共施設は交流機能も持ち合わせています。中でも、浜田市世界こども美術館は、世界に誇る教育施設。先般も、フランス、ギリシャ、台湾から３人の先生を迎えてのワークショップが開催されたり、ブータンの方々との交流会など、浜田ならではの機会提供が行われています。僕はこの活動を応援しています。そうした会には、できるだけ参加しながら、現場の方々、利用者の方々の声をひろうことに努めました。浜田の子育て支援や教育施策の中でもっと活用すべきと、一般質問等においても多く取り上げました。今後も、同美術館を核とした浜田市の幼児教育や保育環境の整備を進言していきます。また、現在、歴史資料館を増築する案が示されていますが、これによって、同施設（機能）をどのようにバージョンアップできるかも重要です。今後の計画の進め方を注視し、目的と事業の適正についてチェックしていきます。

06 コミュニティづくりの手法に創意工夫を持ち込みます。

昨年は、浜田市議会初の政策討論会の実現に至りました。議会広報広聴委員として働きかけた成果が出たものと思っています。もちろんまだまだです。議員間討議をさらに活発化させる課題意識をもって改善に取り組みます。また、2019年11月に、議会広報公聴委員長に就任しました。" 市民の声を第一に "というスローガンを掲げ、新しい顔ぶれでスタートを切りました。同委員会で示した、以下の今後2年間の活動方針にそって、形にしていきたいと思います。

提案内容

1、広聴機能の強化
①収集情報を増やす ▶ 井戸端会議の見直し / 市民スピーチの開催　②市民意見を反映する ▶ 政策討論会の開催

2、広報機能の強化
①提供情報を増やす ▶ ミニ広報のウェブ配信 / 各議員のウェブサイト等のリンク / 議会HPのリニューアル
②情報を平明にする ▶ 議会だより紙面の抜本的な見直し

「へだてる線を消して、つながる線を引いていく」

02. INTERVIEW

矢田 明子 × 三浦ひろき 特別対談

まちづくりには欠かせないキーワードの一つが「コミュニティ」。深く結びついている人々の集まりを意味します。地方社会においても、人との関係性が希薄になりつつある今日。なぜ、つながることが大事なのか。雲南市を拠点に全国でコミュニティナースプロジェクトを展開する矢田明子さんとお話をさせていただきながら考えてみました。（敬称略）

矢田 明子 やた あきこ | Akiko Yata

出雲市生。島根大学医学部看護学科卒。
雲南市が主催する課題解決人材育成事業「幸雲南塾」で地域に飛び出す医療人材によるコミュニティづくりを提案し、2016年より「コミュニティナースプロジェクト」として、その育成やコミュニティナース経験のシェアをスタート。翌年Community Nurse Company株式会社を設立し、代表取締役に就任。株式会社Community Care取締役、NPO法人おっちラボ副代表理事、雲南市立病院企画係保健師なども務める。
2019年第7回DBJ女性新ビジネスプランコンペティション「ソーシャルデザイン賞」、2019年度シチズン・オブ・ザ・イヤーなど受賞歴多数。

社会に線は引かれていない

三浦：浜田市では、今、まちづくり機能の強化を目的に公民館のコミュニティセンター化が議論されています。コミュニティ＋センター。つながりを育む場所と僕は解釈しています。コミュニティナースは、コミュニティ＋ナース。つながりを生み出すナースという感じでしょうか。いろんなところで耳にする、このコミュニティという言葉を、矢田さんはどう捉えているのかなと。

矢田：コミュニティという言葉は、以前は一定の枠組みとして捉えていましたが、最近、そういう「枠」は意識しなくなりましたね。今、おっちラボで、市民財団の立ち上げに向けて動いています。今の雲南市は6町村が合併してできたまちですが、全地域から準備に加わってもらっています。「おらがまち」という境界を越えて、みんなが共感できる部分を切り口にして話し合います。例えば、子どもを応援したいA地域のaさんと、子どもを応援したいB地域のbさんですよって紹介すると、縄張り意識みたいなコミュニケーションは生まれません。共通のキーワードを作るんです。自分が意識しているコミュニティの定義をいかにオーバーラップさせるかということは、意識して取り組んできました。それは、コミュニティナースプロジェクトでも一緒。企業と行政、地方と都市とかそういう感じで括ることはしません。あなたも私も同じコミュニティにいるんですという前提で話します。

三浦：僕がまちに関わる時に意識しているのは、「分解」と「溶解」。まずはそこに何があるかをよく見て（＝分解）、そのあとに、つなげていく（＝溶解）。まちの要素をつぶさに観察して、そのあとは全体で捉えていく感じです。価値観でものごとを括ると、性や年齢や地域を超えてのつながりが生まれます。コーディネートとか事業づくりにはそういう観点が大事だと思っています。

矢田：本質的には自分たちにわかりやすく線を引いているだけで、社会そのものに「線」なんて引かれていません。コミュニティナースの取り組みでは、社会にそんな「線」がないということを体感している人たちがたくさんいますよ。

おせっかいの連鎖を生み出す

三浦：コミュニティナースが、実際に地域の人や地域そのものと接点を持つことで、どんなことが起こっていくんですか？ 起こしていこうとしているんですか？

矢田：スタッフが関わっていた町の人がコミュニティナースになっていくというケースはいっぱいあります。「実は隣のおばあさんが気になるんだけど…」「●●さんもできますよ！声かけてみてくださいよ！」といった具合で、こちらが関わる過程で、関わった人がナース化していくという。それから、自分が誰かを気にかけるだけではなくて、自分も誰かに気にかけてもらうという展開を見ています。「おせっかい」というキーワードをつくったんですが、思いやりに基づいた気持ちの良いおせっかいを、日常的にみんながお互いにやりあっている、当たり前に起きているまちを目指しているんです。こちらの踏み込んだおせっかいを嫌がられたら、引けばいいんです。

（右下に続く↘）

三浦：自分から踏み込むって最初は勇気もいるでしょうけど、そのままにしておいたら、その先に関係性は生まれないことがほとんど。情報発信も一緒で、伝わってないものは、結局、ないことと同じになってしまう。それをきちんと見つけていくって大事なことだと思います。受け身より自発。関わった人がコミュニティナースになるというのは、仕組みが広がっていく明らかな兆しですね。でも、社会に組み込むのは簡単なことではないですよね。

矢田：コミュニティナースを3万人つくるという目標を立てています。コミュニティナーシングを仕事として（対価を得ている人もそうでない人も）行う人を3万人つくったら、社会のインフラ、ブランドとして日本の中に定着していると言えるんじゃないかと。3万人はヤクルトレディの数です（※矢田さんは元ヤクルトレディ）。ヤクルトレディを知っていますか？と聞くと、10人中8人は名前を知っています。4人は見かけたことがある。2人はヤクルトレディからヤクルトを買ったことがあると。これを一旦当たり前の基準とすると、コミュニティナースも3万人になれば…。志のある自治体、企業、市民団体、もちろん個人の方も一緒になって、3万人というインフラをつくろう、日本のブランドにしようとチャレンジ中です。郵便局や駅の職員さんもコミュニティナースになっています。職員さん同士だけでなく、お客さんにも関わっていくんです。喜ばれることで湧いてくる自分の喜びみたいなものを、ご自身のエンジンにされておられるのを感じますよ。人はみんな本能的に持っていると思います、そういう気持ちを。このプロジェクトは、本来そういう優しさを発揮していいんですってことを、参画している人たちがお互いに確認し合う後ろ盾みたいな役割も果たしています。

三浦：コミュニティナースプロジェクト自体が素晴らしい一つのコミュニティだなと。自分のやっていることに確信が持てると最強です。そういう場所に身を置いていると、気持ちが良いし、楽しいし、元気がでますよね。

矢田：得意なことというかできる範囲でやれるおせっかいでいいんです。うれしいですよね。そうすると、人は明るくなります。みんな嬉しいって最高じゃないですか。こっちかあっちか、どっちがいいとかそうじゃないかとか。どっちも取れる第三の道はどうやったらつくれるだろうって、チーム全員が知恵と経験と人脈を出し合えば見えてくるんですよ、どっちも取れる道が。たどり着くまでは長いかもしれないけど、すごくおもしろい仕事をしているなと思っています。

三浦：自分たちの暮らしの中で、つながりの線が双方向にたくさん引かれていくとよいですよね、超複雑に。つながりが増えれば、生まれるパワーも必ず大きくなる。できることも増える。コミュニティは、地域の素地としてやっぱり大事だと思います。改めて、コミュニティナースは、秘められたまちの原動力を見つけるのに有効な手法だと感じました。

〔コミュニティナースとは？〕
病院や福祉施設、訪問看護に従事する看護師だけでなく、地域の中で住民とパートナーシップを形成しながら、その専門性や知識を活かして活動する人材及びその実践のあり方。詳しくはこちら ▶▶▶
Community Nurse Company 株式会社
ウェブサイト：community-nurse.jp

03. COLUMN コラム「一年を振り返って」

こんにちは、三浦ひろきです。任期４年を折り返しました。

所属委員会だけでなく、所属会派も変わりました。「山水海（さんすいかい）」は、自らがヒト・モノ・コトを生み育てていく力をどう養っていくかをテーマに、8名で結成した新会派です。平成の大合併で多様な集落の集合体となった浜田市において、自治区制度の今後の制度づくりが最重要課題であるという認識のもと、全自治区それぞれに暮らす議員が集まりました。個人の力を最大化させるためのチームとして、定期的に意見交換や勉強を行っています。
この間、議員間討議の重要性を訴え、議会での仕組みづくりについて提案をしてきました。それぞれの主張には必ずその裏付けがあり、それをきちんと理解することは、合意形成においてとても大事なプロセスです。監視だけでなく提言機能の向上には欠かせません。さらに、闊達な議論は、そもそも市民間でももっとひらかれるのがよいと思います。お互いの考えやアイデアを共有できる場づくりも行っていきます。行政が担うべきと思うことは議員として後押しをし、自分たちでできること・やりたいことはNPOや与えられた役割の元で、仲間を集めて形にする。これが、僕のまちに関わるスタンスです。まちのネタづくりにさらに尽力していきます。今後とも、叱咤激励いただけましたらこの上なくうれしいです。

© 三浦ひろき事務所（禁・無断転用 2020年3月1日発行）
Copyright©2020 miurahiroki office All rights reserved.